

# ジェンダー・ハラスメントがもたらす不快感の性差

竹西海人（指導教員：中西大輔）  
（広島修道大学健康科学部心理学科）

## 目的

ジェンダー・ハラスメント (GH) とは、「男らしさ」、「女らしさ」といった性別の固定概念による嫌がらせのことである。しかしながら、これまでのハラスメント研究では男性に対する GH について検討した研究はほとんどない。そこで、本研究では、GH がもたらす不快感に性差がみられるかどうか、2種類の GH (i.e., 伝統的な性別役割に基づく「役割ハラスメント (RH)」とそうでない「言動ハラスメント (BH)」) を用いた場面想定法実験で検討した。本研究では「男性よりも女性の方が不快に感じる」という仮説を立てた。ただし、ハラスメントの種類については探索的に検討した。

## 方法

**実験参加者** 大学生 65 名 (男性 33 名, 女性 32 名) が参加した。平均年齢は、男性が  $19.82 \pm 0.98$  歳, 女性が  $20.28 \pm 1.08$  歳であった。

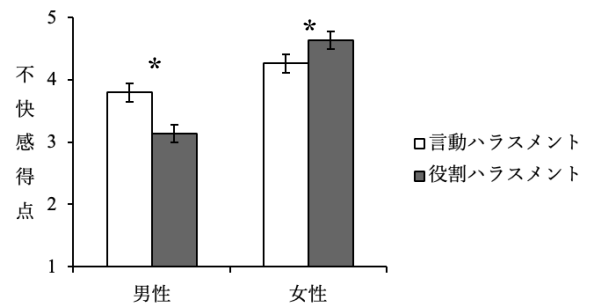
**シナリオ** 職場および家庭場面のシナリオを作成し、どちらにおいても、統計的にハラスメントを行うこと多い男性 (Pryor & Fitzgerald, 2002) を行為者として統制した。職場場面では、職場のある男性から GH をされるシナリオ (「男性なのに頼りがいがない (BH)」, 「男性だから力仕事をしなければならない (RH)」, 「女性だから感情的に話す (BH)」, 「女性だから雑用をしなければならない (RH)」) を用いた。家庭場面では、一緒に暮らしている家族の中の男性から GH をされるシナリオ (「男性だから泣いてはいけない (BH)」, 「男性だから仕事をして家庭を支えなければならない (RH)」, 「女性だから身なりを整えなさい (BH)」, 「女性だから家事をしなければならない (RH)」) を用いた。シナリオの提示順序はカウンターバランスがとられた。シナリオを読んだ後、参加者は本研究で作成した不快感に関する形容詞 10 項目についてどの程度感じたかを 5 件法 (「1. 全くそう思わない」 ~ 「5. 非常にそう思う」) で回答した。

## 結果

**職場場面** 従属変数を不快感得点とした、2 (性別: 男性, 女性)  $\times$  2 (ハラスメントの種類: BH, RH) の 2 要因混合分散分析を行った。その結果、

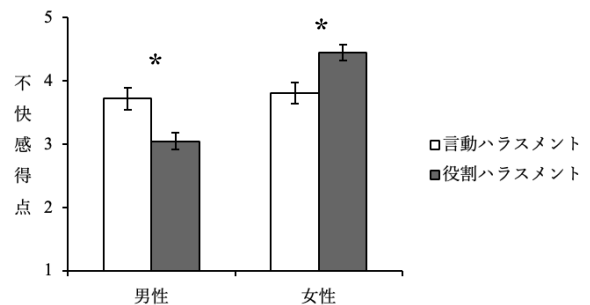
男性よりも女性の方が不快感は高いこと ( $p < .05$ ), また男性では RH よりも BH の方が不快感は高く ( $p < .05$ ), 女性では BH よりも RH の方が不快感は高いことがわかった ( $p < .05$ )。

Figure 1  
職場場面における不快感得点



**家庭場面** 職場場面と同様の分析を行ったところ、職場場面と同様の結果が得られたが ( $p < .05$ ), BH では性差がみられなかった ( $ns$ )。

Figure 2  
家庭場面における不快感得点



## 考察

本研究の結果より、女性よりは不快感は低いものの、特に BH は男性に対し不快感を与えることが示された。また、どのような発言をより不快に感じるのかにも性差がみられ、今後の研究において、ハラスメントの種類とその影響力のメカニズムを明示するのに役立つだろう。

さらに、家庭場面での BH に性差がみられなかったことは特に興味深く、家族という親しみやすい人からの発言は不快感を与えにくいことが示唆される。現代では家事などの役割分担を行うことは望ましいとされる期待や信念があり、それらが RH における不快感の性差を生み出した可能性がある。